

平成26年度活動報告書(1/4)

学部・委員会名	農学研究科
学部長・委員長等氏名	研究科委員長 夏秋 啓子
担当所管	大学院課
テーマ	優秀な進学者の確保と入学者数の増大

※テーマは、具体的な計画・実行・点検・改善のためのPDCAサイクルの基本単位です。

1. 目標(改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など)
理系大学院への進学率は高くなる傾向にあり、本学でも学部4年に加えて博士前期2年、さらには博士後期3年までの一貫した教育による高度化を実現することが求められている。しかし、学部からの当大学院への進学者数は伸び悩んでいる現状であり、改革が必要である。そのため、大学院の魅力を伝える教育や研究情報の発信の充実、学部教育との連動、多様な院生の受入れを可能にするシステム作り等で、内外からの優秀な大学院進学者の確保と増大をはかる。
2. 実施計画(具体的な方法・手段とスケジュールなど)
1. 学部生への大学院教育の重要性と魅力の周知;教員による、より一層の意識的な紹介や勧誘、入試説明会や相談会の複数回数実施、研究の面白さを伝える展示、ワークショップなどのイベント開催を通して、進学者の増加をはかる。進学者の多い研究室のノウハウを共有する。
2. 大学院HPほか広報の充実;広報の内容を再検討し、現役院生の研究と生活、幅広い進路、高い就職率、教員としての就職など院卒者の優位性を紹介するとともに、多様な研究成果や指導教授・准教授情報にアクセスしやすいHPデザインへの改良を含め、広報の充実をはかる。
3. 多様な受験生の受入れ;他大学卒、他分野卒、既卒、社会人、主婦など従来型ではない日本人あるいは外国人受験者を想定した長期履修制度、ダブルディグリー、秋入学、英語での受験や履修、連携大学院制度により、幅広い分野での研究などで多様な受験生の受入れを可能にする。
3. 達成度を判断するための指標
1. 受験生数、合格者数、進学者数および指導教授・准教授ごとの受入れ院生数の推移。
2. 長期履修制度、ダブルディグリー、秋入学そのほか新規の試みのリストアップとそれらへの参入状況。
3. HPの改良の有無。

4. 成果・評価

■成果

1. 全専攻における入試説明会開催の徹底、大学院キャリア意識の開発プログラム、ワークショップの実施、JICAによる国際的院生受け入れプログラムによる入学者の受け入れ、入試問題のホームページ公開などにより、進学者の増加を図った。とくに、入試説明会は、2014年度合計29回開催され、その内訳は、前半（Ⅰ期入試対応）：16回、後半（Ⅱ期入試対応）：13回であった。その結果、志願者数、合格者数の増加があった。

志願者数(増減,増減率) 261人 → 278人 17名 6.5%

合格者数(増減,増減率) 211人 → 222人 11名 5.2%

※平成25年度実施と26年度実施の比較

2. 秋入学のための、主要な出願書類の英語併記などを行い、その結果、平成27年度の秋入学入試がはじめて7月に実施される運びとなった。

3. ホームページの改善

- ・大学院ホームページの抜本的な改善と迅速な内容更新
- ・大学院ニュースページ、資料請求ページの設置と迅速な発送
- ・外部大学院紹介サイトの契約による情報チャネルの拡大

資料：キャリア意識の開発プログラムポスター

資料：大学院ホームページ(抜粋)

■評価(5～1で記載してください)

- 4 方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた

5. 課題及び改善事項

- ・より効果的な入試制度の設計と実現。長期履修制度、ダブルディグリーについては、検討を継続。
- ・留学生に対する入試実施方法の柔軟化
- ・他大学の入試制度やカリキュラム設定、大学院FD施策の調査と本学の各制度の改善
- ・事務体制強化並びに大学院基本情報システムの整備

6. 平成27年度への継続の有無

有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成26年度活動報告書(2/4)

学部・委員会名 農学研究科
 学部長・委員長等氏名 研究科委員長 夏秋 啓子
 担当所管 大学院課
 テーマ 院生の実力および満足度の強化

※テーマは、具体的な計画・実行・点検・改善のためのPDCAサイクルの基本単位です。

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）

大学院生活を満足度の高いものとし、実力ある院生を社会に輩出することは、大学院の責任であり、また、受験生の確保にも必要である。大学院の目的に合致するよう、院生の能力や希望に配慮しつつ、十分な研究指導を行うとともに、多様な職種や進路を視野に入れた就職指導、さらには人間力を養うための研究室における全人的な教育の実施が求められている。しかし、今まではそのような仕組みづくりを組織的におこなってきたとはいえない。そこで、専攻が責任を持ち、かつ、指導教授・准教授の誰もがこのような教育を行える仕組みを作ることにより、院生の実力および満足度を強化する。

2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）

1. 院生の希望、教育や研究に対する満足度、不満や疑問点、研究の進捗状況、就職活動の進捗状況ほかを院生と教員との定期的な面談による記録、および、それに基づく点検や改善。
2. キャリアセンターと連携した就職活動の支援や本学院卒者によるキャリアセミナーの開催
3. 大学院FDに関わる教員向け講演会、大学院FD委員会における大学院教育上の問題点の共有や改善への取り組みなど大学院FDの強化。

3. 達成度を判断するための指標

1. 院生と教員との定期的な面談の実施率。
2. 院卒者によるセミナー含め、キャリアセンターと連携した就職活動に関わる取り組み数。
3. 大学院FDに関わる教員向け講演会（研究科主催）の実施数と参加教員数。
4. 大学院FD委員会の開催回数。

4. 成果・評価

■成果

1. 院生と教員の面談を推進するため、昨年までは実施されていなかった院生指導・論文作成状況の報告を実施した。その結果、専攻主任による、各院生の状況把握が行われ、各専攻からの報告を得た。
2. 昨年は実施しなかったセミナーイベントを以下のように実施
本学の院卒者による「キャリア意識開発セミナー」および
外部専門家を招いての「キャリア意識開発セミナー」の実施
世田谷の M1、D1、D2 の合計数:178 全体の 15% である 27 名(のべ 54 名)目標としたところ
これとほぼ同等の、のべ50名の参加があった。
3. 大学院FD委員会の開催9回(目標通り)

■評価(5～1 で記載してください)

- 3 方針に基づいた活動ができた

5. 課題及び改善事項

- ・次年度は、学生の研究の進捗状況、研究環境の満足度をより可視化し把握する
- ・大学院 FD に関わる教員向け講演会を実施する。

6. 平成 27 年度への継続の有無

有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成26年度活動報告書 (3/4)

学部・委員会名 農学研究科
 学部長・委員長等氏名 研究科委員長 夏秋 啓子
 担当所管 大学院課
 テーマ 教育・研究の一層の質保証

※テーマは、具体的な計画・実行・点検・改善のためのPDCAサイクルの基本単位です。

1. 目標(改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など)

大学院における研究の高度化は社会の要請であるが、そのためには教育の質を高める必要がある。そこで、教育内容や研究指導体制の点検と改善、語学教育やインターンシップなどの機会増大、院生による内外での研究発表や諸活動の支援、専攻の看板となる重点研究への注力により、教育・研究の一層の質保証をはかる。

2. 実施計画(具体的な方法・手段とスケジュールなど)

1. 授業評価等を参考にし、カリキュラムポリシーに基づく、カリキュラムやシラバスの専攻としての毎年の点検。
2. 院生の希望に合った研究テーマについて、多様な知識や技術を習得しつつ、十分な指導を受けられるようにするための指導教授・准教授複数担当制の検討。
3. 大学院として設置する留学生対象の日本語教室の開催。
4. 重点化研究等研究経費を活用した各専攻における看板的研究への注力。

3. 達成度を判断するための指標

1. 授業評価実施率および専攻におけるカリキュラムやシラバスの点検実績。
2. 日本語教室の開催の有無。
3. 大学院生を筆頭著者とする口頭／ポスターあるいは論文数。
4. 各専攻の研究やそれに関わる院生を取り上げた取材、マスコミ記事など社会への発信数。

4. 成果・評価

■ 成果

- ・授業評価実施率 2013 年度 10.6%(F:12.7+L:8.4)%/2。シラバスの点検を実施。
- ・博士後期大学院生支援など、大学院生による研究の高度化(大学院高度化推進事業 26 名応募)
- ・重点化研究等研究経費を活用した各専攻における看板的研究への注力。その結果、平成 26 年度学会等各賞受賞大学院生は 17 名(前年度修了者含まず、本学HP掲載分のみ集計)となった。

■ 評価(5～1 で記載してください)

3 方針に基づいた活動ができた

5. 課題及び改善事項

学術振興会特別研究員への応募と採用への強化をはじめとした院生による研究の充実を図る。また、指導教授・准教授複数担当制についての検討を継続する。

6. 平成 27 年度への継続の有無

有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成26年度活動報告書(4/4)

学部・委員会名 農学研究科
 学部長・委員長等氏名 研究科委員長 夏秋 啓子
 担当所管 大学院課
 テーマ ディプロマ・ポリシーを実現するための取り組みとその成果の点検
 ※テーマは、具体的な計画・実行・点検・改善のためのPDCAサイクルの基本単位です。

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）

本研究科の教育目標を踏まえたディプロマ・ポリシーに①確かな知識と技術を有する者、②研究者、教育者あるいは専門家としての能力を有する者、③論文の執筆や口頭発表を行う能力、さらに多様な発信力を有する者、③科学者としての倫理を理解し、社会の問題に目を向け、問題解決に取り組む意欲と能力と意欲を有する者と明記し、課程修了までに修得しておくべき学習成果を明確に示すとともに、印刷物やホームページでの周知にも努めている。しかし、その実現にはさらに具体的な方策が必要なため、研究科全体での理解に基づき、各専攻の方針に合致したディプロマ・ポリシーを実現するための取り組みとその成果の点検を行うことを目標とする。

2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）

- ディプロマ・ポリシーの周知；院生および教員がともにディプロマ・ポリシーの内容を理解し、教育・研究活動に反映できるよう、学年始め等の専攻会議や講義・演習の初回等での確認を行う。
- 個別指導の充実；確かな知識や技術を習得するための講義・演習・実験等の科目の充実は当然として、さらに、院生一人一人の理解度やニーズに応じた個別指導を心がけ、学習を確実なものにする。
- 学外専門家との協働による教育の充実；社会が求める研究者・教育者・専門家としての要件について理解するため、専門家による講演会等の開催に加え、指導を受ける機会を多く設ける。
- 多様な発信力を身につける機会の増大；学会ほかでの口頭あるいはポスターによる報告を行う機会を増大させるとともに、内容のみならず表現力や発信力にも重点を置いた指導を充実させる。

3. 達成度を判断するための指標

- ディプロマ・ポリシーの理解と達成度に対する評価を、院生による授業評価の一部として実施。
- 研究者・教育者・専門家および、それら以外であってもディプロマ・ポリシーを体得した人材ならではと判断できる進路へ進む者の人数。

4. 成果・評価

■成果

- ・ディプロマ・ポリシーをホームページ等周知(事実)すると同時に、農学研究科小委員会においてディプロマ・ポリシーの再確認を実施(事実)し、一部の専攻で改訂を行った(事実)。また、ディプロマ・ポリシーに基づき、各専攻における学位論文審査基準を策定(事実)し、研究科委員会で確認と周知を図った(事実)。これらに基づいて教育を行ったのち、大学院生による授業評価を実施(事実)したが、授業評価の実施率が低く、またディプロマ・ポリシーに対する理解を評価する質問項目を設定しなかったことや結果のフィードバックが十分に行えなかったことから、授業評価では達成度の判断はできなかった。
- ・大学院修了者の就職状況は向上している(事実)が、ディプロマ・ポリシーを体得した人材ならではの判断できる進路についてのさらなる検討が必要であり、人数を明記することはできなかった。

■評価(5～1で記載してください)

- 2 方針に基づいた活動ができたが、成果の評価が難しい活動であり、検討を要する。

5. 課題及び改善事項

ディプロマ・ポリシーを実現するための取組みは、引続き行う必要があるが、その手法として、次年度以降は大学院 FD 委員会での検討やそれに基づく実行により進めることが適切である。

6. 平成 27 年度への継続の有無

無

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。